

【書評】

石川弘道 著『落語と情報学』

斎藤 弘 行

Hiromichi ISHIKAWA "Rakugo & Information"

Hiroyuki SAITO

はじめに

「落語と情報学」という書物についてコメントもしくは感想を語るに先立って、規準となるべきこちら側の立場を若干示すことが必要である。それは経営学の一端を専攻する者の一人として、経営学のなかに、ユーモア、笑いなどということがどうしてまともに考えられないのか、そのことをうまく経営学のなかに組入れるにはどうするのがよいかと日頃考えているおかしな人間の立場である。もしも経営学のなかで、ユーモアや笑いが正当に扱われるならば学問の組立が大いに変わるに違いない。そういう試みは今のところ批判どころか馬鹿にされるかもしれないと恐れと畏れをなしているけれども（といってもユーモアについて書いたことはあるが）、いま再び、古典落語を扱った情報に関する書物について何かを述べることは、そういう強迫観念に悩まされるのではないかと大いに心配しているところである。その際、本稿は科学的には書かれていないし、またそのようには書

けなかったことをお断りしておく。

落語と情報の一般的コメント

落語と情報（以下情報学でなく情報の語を使う）という組み合わせのなかで、落語を主にするか、情報のことなのかをすぐに煩い意見が出されるし、そのような質問をすることを得意とする人もよく見かける。しかし著者のいう如く、「駄洒落を新しい情報を醸し出す醸造の原料とするならば、そこから情増（情報の増大）が始まります」ということにより、そうした屁理屈的質問が一蹴されることになる。要するに落語が先か情報が先かという議論をしてもはじまらないし、そういう心算りで書かれているのではないのだから、どちらのことかと脅されると困るであろう。

我々の理解する落語と情報についてほんのわずかに示すことが次のステップであろう。情報について、辞典によると「ある誰かもしくはある物についての情報であり、それについての事実から成り立っている」と説明されている。この

やり方は情報とは何かとは言わず、何かについての情報という説明方法であり、厳格には定義ではない。しかしある抽象的な事柄について説明をしようとすれば、人を納得できないことが多いのを我々は経験的に知っている。これにたいしてその言葉が用いられるセンテンス（または句）をまるごと引っぱり出すとかえってよく理解されることが多い。それで我々もこの手を使うといま挙げたような説明文を得ることになる。事実から成り立っていなければならないと決められると、それで動きがとれない。空想的なもの、単に心に浮かんだものは事実でないのかどうか、数学の公式のようなものは事実というのかなどと、次々に人を悩ませる問題が出される。それで再び事実について何か言わなければならない。そこで事実を文章上のことと見ると、あることを強調するために事実といたり、文章の主語になることが事実であったり（例えば何々はこれこれであるというときの何々が事実となる）する。文章のなかで事実さらには、今述べたことをさらに詳しくしようとするときにも「事実こうだ」などという。それは前言を補い、修正し、これまでの言葉との比較をすることである。通常は文章上のこととは別に自分の考えていること、行っていることが正しいかもしくは真実だと自分で思うときにも事実ということも多い。また事実と情報を結びつけて、人が明らかにすることもしくは発見することのできる情報の断片を集めたものという説明も見ることができる。

前に情報とはものごとについて、またある人についての事実から成り立っているといたけれど、このなかで事実のどれが我々の情報の理解に役立つかは判断できないかもしれない。もし

も最後の説明を用いると、「情報は何かまたは誰かについての事実であり、この事実は情報の断片の集合からでき上っている」という堂々巡りになる。従って厳密な意味では情報の定義としては矛盾している。しかし事物や人間について具体的かつ経験的に知ったり伝えたりすることは、情報を伝えるのでなくて、何か、もしくは誰かについての情報を伝えたり、知ったりするのであって、日常生活ではこれで十分であると断定してしまう（無理があるのを承知の上で）。結局、この場合我々は空概念を操っているのでないということである。

情報の言葉についての詮索は一応中断し、落語についての考え方を示すことが次の課題である。対象である著書は落語を材料として情報の理解をすることを狙っていることははっきりしている。そこで材料として落語のほかに、どのような材料があるかどうか、また、あるとすればどうして落語が選択されたのかといった理屈を言う者もあるが、我々はそのことに触れず、落語の意味を考えてみる。

先ず「落語と情報」についてというテーマは、例えば「落語と法律」や「落語と医療または医学」などのテーマとして、法律家や医師が書物を出しているのと同じ範疇に入る。それは落語の中に法律問題を見出し、庶民その他の生活に現れる諸問題を現在の法律で処理したらどうなるかといったことを教えてくれる。例えば、当著書における「壺算」のなかの支払い方法は詐欺罪になるか、「時そば」も同罪か、「品川心中」は殺人未遂なのかどうかといった側面で捉えることができる。現在、廓の存在は認められていないが、「錦の袈裟」「品川心中」などのような遊びは可能かどうか、実行したらどういう法律

違反になるのかということなど知りたいものである。

また落語について医学の側面から注目するとすれば、「大山参り」の置いてきぼりの男は宿酔は大丈夫なのか心配である。しかし当該著書でとりあげた題材のなかには病人はいない。してみると医学でも精神医学を通し、登場人物のなかに病理的症状が見られるかどうか、またその人物の言動が通常の規準ではおかしいかどうか判定することができる。といっても大抵は落語国の住人は、どこかおかしいのであって、多分医師は、それぞれの言動にたいして、何かしらの病名を付けるに違いない。

落語の考え方についてさらに若干の知識を得ることにする。もっともそれについても専門書に任せるとして我々は通常の初歩的知識にとどまるであろう。落語が滑稽とサゲ(もしくはオチ)を基本とすることは誰もが知っている。そのとき情報源としての落語を思うと、題材の特色を知ることのほうが重要である。落語は人間のまわりの、人間にかかわるあらゆる事象を扱うし、空想の世界にまで立ち入るから、文字通り森羅万象が題材となる。落語が小咄から発展したとしても、先にあげたように必ずしも、滑稽、諧謔、オチのルールに拘らないこともある。と言っても、落語は今日、よく知らない人にとっては、可笑しいこと、面白いこと、何より先に笑わせてくれるものという考えがあって、その点でいくらか誤解されているようである。このことが新作落語のジャンルで、ほとんど間断なく笑いをとるような組立をしなければならないといった負担が課せられることになる(そうでない新作物もあることはいうまでもないが)、そこで著者が古典ものを切望するのは正しい。

落語はそのルールのいかに拘らず、人の生活の中での登場人物の生きかた、人情、それを取り巻く風俗などを描きながら、笑わせ、しみりさせ、怒らせ、泣かせるといった、人間の情緒の中に直接的に浸透して行くことを特色とする。それは演劇を観覧するのと全く同じであり、そうした場において演者との同一化が発生させられ、甚だ心地よい気分させてくれる。しかし基本的には落語は一人芸だということは一般の演劇とは別である(もちろん他に一人の表現形式を用いるものもあるが)。芝居噺などを除いて一人で、かつ扇子と手拭それぞれ一本づつをもって、世の中のあらゆること、あらゆる人物を表現する。

我々はこうした既に多くの人の指摘された落語の特色をあげることは別にして、落語のテキストについての若干のコメントをしておく必要がある。というのは、落語のテキストを通して、何らかを相手に訴えようとするのが当該著書「落語と情報」の試みとみられるからである。前にあげた如く、法律や医学について落語のテキストを用いるものもあるが、それは情報としての落語の内容とは別の扱いかたをしているように思われるからである。前者においては登場人物の行動もしくは精神状態を今日の学問に照らしてみると、どのように判断されるかといった点にある。それと共に、情報として捉えられていて、それが情報としてどんな意味を持つかといった考えを土台にしているように思われる。

このあたりをもう少し補強する。落語のテキストは物語、ストーリー、スジを形成していて、それは小咄からの発展かどうかにかかわらず、ストーリーだけを見るよりも、演者との関係が

濃いことに注目する。テキストを読んでも十分面白いけれども、その時代的背景、風俗、その時代のいわばエトスといったものが十分読者にインプットされていなくてよいものかどうかということである。高座の咄を聞かないで文章だけで、つまりストーリーだけで、いはば初心者が人生の機微を含んだ会話や行動を解することができるかどうかという疑問がちらつきはじめる。落語がテキスト化されたのは特に明治期以後のことであり、その頃速記本が巷に行き渡り、民衆の手に入り易くなってはいたけれども、そのとき庶民は寄席で咄を聞いていてその内容を既に知っていたのである。関東大震災後の東京の寄席は十五区内とその周辺を合わせて百八十軒以上あったというから、明治期にもそれ以下ではないことが推量できる。ということは大抵の人は落語をテキスト以前にナマのままの演じられた姿で理解していたことになる。それはシェイクスピアや近松の演劇がテキストを中心にしている意味と異なるということを教えてくれる。耳にしない落語は本当の落語とは言えないのではなかろうか。

落語のユーモア性とストーリー

落語が情報学の対象となることができるかどうかについてももちろん可能であることに異論はない。さらに落語を何らかの材料に用いること、ここでは情報の理解の手段となることについても特に反対する理由もない。そこで我々の「落語と情報」についての内容について、落語が今日の一般大衆にどのくらい理解されるかという一般的あとづけ（これに関して前に若干述べた通り）の必要性と、取り扱われた落語の題材と

情報の理解との整合性を考えてみることにここでは限定する。

最初の問題について、今日かなりの人が落語の中に語られる、洒落もしくは洒落気、もしくは（西洋流に）ユーモアなどどのくらい日常会話のなかで用いられるかどうか推測してみる。結論的には通用しないことが多いというほかない。例えば、グルメの世の中で「あいつは酢豆腐の若旦那だよ」といったり「いや、これはふだんの袴だからいいんだ」とわざと威勢をつけたりしたとしてもどうだろうか。また「おれは短命だよ」というのが自分の女房の自慢だということがすぐわかるかどうか考えてみる。「あの人の料理自慢は寝床だよ」といえば今でもわかってくれるであろう。

これにともなって落語は単なる笑いではないことも、ストーリーを厳密に調べるとわかる。それは登場人物が、高貴下賤を問わず、醸し出す可笑しさや悲しさを包みこんでいるとわかってくる。日本語の笑いということが、滑稽と結びついていて、そのことは「東海道中膝栗毛」や「浮世風呂」などを連想させたりするが、むしろ落語の笑いには西洋語のユーモアが入っているのではないだろうか。河盛好蔵は「エスプリとユーモア」の中で漱石の定義をあげている。「ヒューモアとは人格の根底から生ずる可笑味である……ヒューモアのある人の行為は、他人から見ると可笑しいが、当人自身では可笑しがられる訳がないと思ってゐる。……無意識に可笑味を演じつつある。……当人の天性、もって生まれた木地から出る」と。いわば上品な笑いであり、人情味溢れる笑いである。こういう笑いを現代人は忘れかけている、というよりもそれでは刺激がなくて笑ってくれない。このよう

に見ると、どのくらいの人が落語の本当の姿(本質)を知っているかどうか不安となる。「お直し」の中の夫婦は蹴^り鞆^{こま}を始めるが成功しない。自分の女房を店に出すことは大そう思い切ったことであり、悲しいことなのである。「厩火事」の中の亭主は最後に思わず本音を吐いてしまう。それは男がすべて持つ気持ちを代弁しているかもしれないが、女房にはわからないのが悲しい。そういう事例が落語にはふんだんにあって、今の社会でも通用する笑だと思っているのが、我々、落語国の住民の浅はかさであるかもしれない。落語を聞いて、あるいはいまそのテキストを読んでただ可笑しかった、とかすっきりしたという情報の受取りかたはいかがなものかといっても始まらない。

後者の課題に入るに当たり、先に我々は情報を何かについての情報と理解したことを思い出す。これはシステムについて同じように何かについてのシステム(例えば社会的システム)としないことには抽象的説明に終わるのと似ている。我々は情報について、形而上学的もしくは神学論的説明を排除する立場にある。対象として「落語と情報」においても、情報の意味内容を十項目に区分しているが、これは非常にわかり易い。これだけ知っていれば情報とは何かという神学論争を挑まれても困らない。経営学もこのように説明できればと切齒扼腕して悔しがっているところである。情報の定義を並べたところで何の足しにもならないことを、当該著書では承知しているように思われる。そのことは非常に決断のいることと推察できる。このことについて専門家を前にして失礼ながら情報についての説明に苦心のあとが伺われるものをあげると、次のようになる(経営学についてのドイ

ツ語圏の事典)。情報は知らせたり、聞かれたことに応答したり、教え導いたりすることが一般的な理解である。そこで情報は伝達を、つまりコミュニケーションを必要とする。それ故に情報は同一事象にたいし二つの視点を持つ。コミュニケーションなしには情報はないしその逆のことでもある。そこで通常の言葉の使用方法に従うとしている。このようにしてこの事典は情報の説明が禅問答や循環論にならないように計っているのは賢明である。

対象図書は早くからこのことに気づいているように見える。そこで情報と落語(もしくは落語と情報)をドッキングさせるし、そのようにすることにより、情報が理解できるとするプランを立てていることがわかる。既に落語を一般人がすんなり理解できるかどうかについて心配したが、ここではそのことを一時引込める。要するに情報が分かればいいのであり、落語のあるストーリーを通過することによって読者は情報の説明へと比較的楽に入って行くことができる。それは単に易しく説明しようとすることにとどまらない。この書物を通し「情報に関する情報がどのようなかという情報」を豊富に述べる。従って、世の中で情報に関連する、最先端の知識と技術、および機器の事情をも手早く獲得することができる。

最後に当該書物で引用される落語の題材とそれについての情報の意味を、そのまま引用すれば次のようになる。

(1) 「道灌」「雁風呂」を通して、「いたるところ知の源泉」とする認識を得る。情報の背景となる事柄(事実)はいくらでもあるから、常にそれを求める努力を怠らないことを伝えて

いる。そのことによりある事象に対する固定観念が和らげられることになると教える。さらに情報化社会での生活は情報技術だけでなく、過去の体験（知恵）も必須条件となるとも言っている。

(2) 「情報洪水」の中をどうすれば抜け出すかについて、「寿限無」「一目上り」がヒントとなる。情報が多いからというだけでは、また多く使ったからといって必ずしも良い結果は出ないことを伝える。情報化社会では道具を揃えて、使いこなしたとしてもうまく行かないと忠告してくれる。何ともないようなメッセージを敏感になって読みとることも大切であるという。

(3) 「紀州」「ねずみ」では、同じ情報がある思い込みをするという事例としてあげられている。受け取る者の思い込みプラスその人の置かれている事情がその人の判断に作用する。偏差値も使いようによっては良いこともあるという。

(4) 情報のスピードの大切さを考える手がかりを与えるのが、「大山詣」と「品川心中」である。情報を早く受け取ったらそれに対してどうするかは事象によって異なるとしても、それだけ早く着手（出発）できることがメリットである。さらにタイムリーに情報が受け取られることが重要であり、これはどのような先端技術の機器を通して未解決のことかもしれない（とは著者は言わないが）。

(5) 「お神酒徳利」「てれすこ」において「情報の上手な使い方」を知らせる。情報リッチと情報プアの関係をうまくこなすことにより優れた地位につくことができるとするよい例である。そのために情報の悪用がなされないよう

にと窺っている。また今日の社会では最低限必要な情報活用能力を持たなければならないとしている。

(6) 「時そば」「壺算」は情報操作と論理的思考の大切さを教えている。特に意図的になされると、情報認識の客観性が失われることは、落語国ばかりか、経済その他の数値が現在いかに、いかがわしいかを人々は体験する。それでも人は誤るのである。そのためにも論理思考を持つべきだとする。

(7) 秘密情報の漏れやすさと、その利用について「田能久」「まんじゅうこわい」が示される。希少な情報は誰もが欲しがるとは経験的にわかっているし、その種の情報がきちんと守られることは先ずない。一度発言したものは戻って来ないことを銘記すべきである。とくに意図的に情報を流すこと、場合によっては虚の情報を通して利益を得ることも出来る。さらに弱点（および不正）の情報は敵方に利用されるから注意を要する。防御手段はないけれど、信頼関係が唯一のものかもしれない。

(8) 「コミュニケーションは情報の共有である」ことについて、「蒟蒻問答」「松山鏡」を引用する。この落語において本当は共有していないのだが、表面上は共有とみなされ、コミュニケーションをなされたことになっている。非言語コミュニケーションを加えると情報が正確になるかもしれないかならないかもしれない。さらに情報の共有は信頼によることは今日の社会でも変わりはないと指摘される。

(9) 「芝浜」と「長屋の花見」を通して、「夢と現実を創り出す」情報の不思議の作用について説明する。人は現実に体験したことだけでなく、夢の中でも生活する事実を伝えている。

決して架空の中に居ないといってもそうでない人も存在するのが落語国である。また夢を夢としてあえて生活のなかに組み入れて楽しく暮らす術を教えている。情報は真実 = 事実のみを伝えるのでなく受手が虚であってもうまく転換できるのだということである。

(10) 情報が付加価値を大きくする事例として「茶金」「錦の袷袷」があげられる。これは何の価値のない品物が特別なことを通して価値が加わることを示す。本来の機能とは無関係なことが価値となる。偶然的に情報が加わることもよくある。今の社会ではブランドかもしれない。

終わりに

「落語と情報」という書物について若干のコメントをしたのだが、学問的考察のレベルでのコメントではない。特に情報学についての知識の不足のためにそうなる。情報を脱人格的なものと見ると落語を情報の題材にできないが、本書は落語のテキストを忠実に受け取り、情報説明の手段としている。また情報特性の各項目に対応する落語の選択も概ね納得できる。今後より人情的な情報についても知りたいものである。

(さいとう ひろゆき・東洋大学教授)